【書く・なぞる】俳句 小林一茶 一

やれ打つな 蠅が手をすり 足をする

これがまあ 終の栖か 雪五尺

雀の子 そこのけそこのけ お馬が通る

泣け涙 蟲の命も あるものを

瘦蛙 負けるな一茶 是にあり

【書く・なぞる】俳句 小林一茶 二

我と来て 遊べや親の ない雀

蝶々や あしたば食って すぐ翔べよ

梅が香や わが寝る床の 紙障子

夕立や 木の葉をつかむ 風の音

一匹の 蚊にも五分あり 六分あり

【書く・なぞる】俳句 小林一茶 三

名月や 膝にのこる 父の影

下萌や 雀の雀 子をこぼす

我が肩に 大きなのっかる 雪の粒

寝るときも 子に鼻歌や 夜の雪

みの虫や 母が手紙を 読む夜更け

【書く・なぞる】俳句 小林一茶 四

目見る 雀の群れや 稲の束

餅つきや あたり一面 母の声

この道や 行く人なしに 秋の暮れ

親譲り たまの着物の 虫干や

朝顔に つるべ取られて もらひ水